

## 【会員だより】

## 技師一年生からの投稿

## 診療放射線技師 1 年目

松江赤十字病院 石倉 周平(大学4 回生)

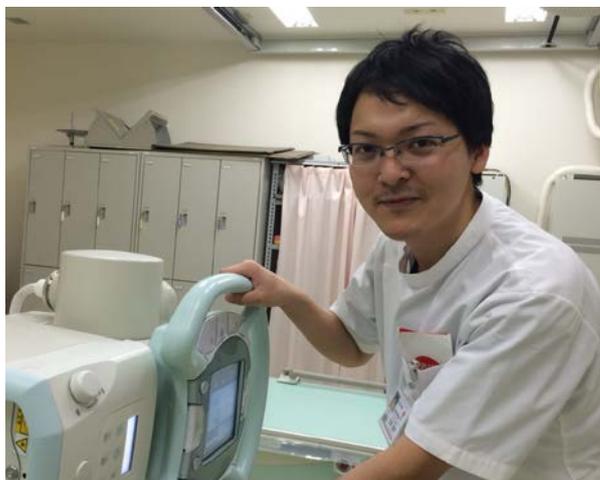
松江赤十字病院の石倉周平です。生まれ育ち、愛着のある地元の島根県に就職しました。当院は、島根の中で主要な病院です。モダリティに関しても多機種を備えており、その中で島津製作所製の装置もあり、京都の学校を忘れることはありません。また、災害拠点病院としても活躍しています。

仕事内容は、入社当初は日当直が出来るように一般撮影・透視・CT・MRI をローテーションで指導していただき、それからは、心カテ・アンギオなど他の検査をするようになりました。仕事で一番難しい事は、患者さんとの接遇です。患者さんは病気と向き合って治療に励んで居られるので、精神的にもつらい状態です。どのように接するかで気持ち良く検査してもらえるかが決まります。説明を丁寧にするかしないかでも、画像の良し悪しにつながります。また、協力的な患者さんいれば、非協力的な患者さんもあります。どう理解してもらえるか、毎日勉強です。当初は、説明や行動がとても遅く、先輩に遅い遅いと言われ続けました。しかし、慣れると少しは速く動けるようになり気持ち的にも余裕も持てるようになりました。

同期とも、悩みを相談したりされたり、アドバイスをしあい、自分達でこんなことがあったと教え合っています。そして、先輩にもたくさん教えていただいています。同窓の先輩方もたくさん居られ、毎日いじられながらも楽しく仕事をさせていただいています。また、つい先日には学友会の山陰支部総会で大先輩方ともお話をさせていただく機会があり、とても勉強になりました。

同期とも、悩みを相談したりされたり、アドバイスをしあい、自分達でこんなことがあったと教え合っています。そして、先輩にもたくさん教えていただいています。同窓の先輩方もたくさん居られ、毎日いじられながらも楽しく仕事をさせていただいています。また、つい先日には学友会の山陰支部総会で大先輩方ともお話をさせていただく機会があり、とても勉強になりました。

仕事は常に情報・装置などが新しくなっていきます。医療の現場では、常に勉強していかないとたちまち置いていかれます。大学生の頃は勉強だけでよかったのですが、これからは仕事をしながら勉強をしなければならぬので、少し大変です。しかし、仕事にやりがいを持ち楽しい日々を過ごしています。



## 診療放射線技師になって

関西医科大学附属病院 眞田 惇平(大学4 回生)

私は本学を卒業し、関西医科大学附属病院に勤務しています。附属病院は三カ所あり、京阪沿線に枚方、滝井、香里病院とあります。私はそのうちの滝井病院で日々、撮影業務をしています。滝井病院は病床数 494 床で三次救急医療機関であり、大阪府北河内医療圏における基幹病院であります。診療放射線技師数は 22 名で、業務は一般撮影、CT、MRI、RI、血管造影、放射線治療があります。入職してからは主に一般撮影、ポータブル撮影、透視検査、救急CT を週毎に担当しています。一般撮影法は国家試験勉強で覚えました。しかし、当然ですが患者の状態や体格などはそれぞれ異なります。最初の頃はそんな状況の中で、患者一人一人に適した接遇や撮影順序、撮影条件を、覚えた方法からどのように応用を利かせ、実践すれば良いか悩んでいました。しかし、間違いを指摘しアドバイスしていただいたり、気にかけて声を掛けて下さる職場の先輩方や、同期の存在にとても助けられました。同期とは業務終了後に残って互いにポジションの練習をしたり、一年目ならではの悩みを相談したりと色々な面で励みになっています。入職者が私一人だけではなくて良かったと本当に思いました。滝井病院では 7 月から一人で当直業務を行います。初めての当直の救急はとても緊張しました。救急で運び込まれて来る患者は迅速な処置が必要なので撮影も迅速かつ正確に行わなければなりません。最初は何を優先して行動すべきか、救命医がどんな画像を必要としているか判りませ

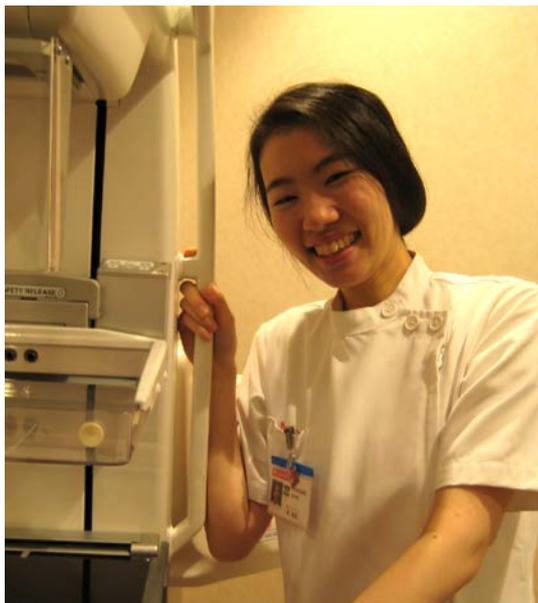


んでした。そのため、落ち着いた頃に救命医に何を重点的に観察したいか、どのタイミングの造影CT画像が欲しいかを話し合うことでフィードバックし、実践できるように努力しています。入職して約半年が過ぎ、病院という特殊な環境にも少しは慣れて、医師と話し合うことでチーム医療に参加しているという実感も湧いてきました。しかし、まだまだ経験が浅く、臨機応変に行動が出来ないので、日々努力して技術の向上に励みたいと思います。

## 技師一年生

日本郵政株式会社 京都通信病院 森 奏 恵(大学4回生)

私はこの春から京都市内、新町六角に位置する京都通信病院に勤務しています。同期入社が私以外に一人だけだったので、最初はとても心細く感じていました。しかし、母校出身の先輩技師に手取り足取り指導していただき、まだまだ覚束ないながらも毎日の業務にあたるようになっていきます。



当院は病床数99床の小さな規模の企業病院で、モダリティも限られています。その中で、マンモグラフィ検査だけは女性が担当することになっており、勤務3日目からいきなり検診のマンモグラフィ撮影を任せられると言う、とてもスリリングな技師ライフがスタートしました。

検査に携わって半年が過ぎましたが、特に印象に残っていることは、患者様が「マンモグラフィ検査で、乳房を押さえる理由は知らなかった」と話され、お礼まで述べられたことでした。“説明することの大切さ”を痛感した瞬間でした。しかし、いつでも誰にでも丁寧に説明さえすれば善いということではないようです。毎年のように検診でマンモグラフィ検査を受けに来られる患者様の中には、私よりも検査に慣れた方も居られ「説明はいいから早く」といった表情をされることがしばしばあります。受診者の表情を見て、どの程度説明するべきなのかを窺い知るスキル・観察眼も必要だと感じる

毎日です。

外来受診される患者様は検診と異なり、再検査に臨まれる方や自覚症状を訴えて来られる方、既に治療されている方など多様です。それぞれの患者様に合わせた話し方が幾つもあるように感じます。それを自然と実践できるようになるのはとても難しいことですが、常に何か工夫が出来ないかを意識して業務に励んでいます。

今後は、当院内のモダリティについては勿論のことですが、設置されていないモダリティについても、勉強会や学会へ積極的に参加して、知識を深めていきたいと考えています。

## 診療放射線技師になって

滋賀医科大学医学部附属病院 井場 美里(大学4回生)



私は本学卒業後、滋賀医科大学医学部附属病院に勤務しています。業務は一般撮影、MRI、透視検査、骨塩定量検査、マンモグラフィを担当しています。最初の頃は、患者さんとのコミュニケーションが上手く取れなかったため、ポジショニングがなかなか上手くいかず失敗ばかりしていました。特にマンモグラフィは私たちの撮影技術だけではなく、患者さんの協力が必要な検査です。また、不安を持って検査に来られる患者さんが多いため、いかにリラックスして検査を受けてもらえるかが大事になります。そのためには私たちが積極的に話しかけなければなりません。しかし、何を話せば良いのか半信半疑でポジショニング時の必要最低限なコミュニケーションしかできませんでした。私にはこの仕事は向いていないのではないかと、悩み落ち込むことがありましたが、検査後に患者さんから「ありがとう」と笑顔で言われると嬉しくなり、この仕事に就いて良かったとやりがいを感じるようになりました。

学生時代は、国家試験合格に向けて日々勉強をしました。友達と一緒に問題を出し合い、疑問点は教え合い、全員

で合格できるようにお互い励まし合いながら頑張ってきました。毎日が勉強ばかりで辛い時もありました。息抜きも必要ということで、ルームシェアをしていた私の部屋に友達が集まってきて、料理を作ったり飲んだりしました。とても良いリフレッシュになり、振り返ると楽しかった思い出です。同じ悩みを打ち明けられる学生時代の友達は大切な存在だと感じています。

私は診療放射線技師としてまだまだ未熟で、学ぶことがたくさんあります。先輩方を見ながら技術と知識を身に付け、チーム医療の一員として活躍できるように頑張っていきたいと思います。

最後に、在校生のみなさん。勉強ばかりで辛い時がくると思います。1人で頑張らずに友達や先生方の力を借りて、国家試験合格を目指して頑張ってください。

誇りをもった放射線技師を目指して

名古屋掖済会病院 松井 幹典(大学4回生)

私は本学を卒業後、地元である愛知県の名古屋掖済会病院に勤務しています。当院は“断らない”を標語に掲げた東海地区第一号の救命救急センターです。そのため長年の経験による救命救急センターならではの多くの工夫が見受けられ、スタッフの多くもそこに誇りを持って働いています。

この病院に縁あって就職することになり、働き始めてからは単純撮影とポータブル撮影をメインに行い、今は一般病棟での勤務後、救命センターで当直業務を行えるように、センターでCTや透視などを、実践で学ぶ毎日を送っています。病院に勤め始めた頃は大学で学んだ知識と現場での実技とのギャップや、患者様への接遇や医療人としてのマナーなど正解のない問題で悩み、苦しみました。しかし、職場の先輩方のアドバイスや励ましをもらい、無事に半年間務めることができました。まだまだ先輩に助けをもらうことが多い毎日ですが、4月に比べてできることも増えてきました。しかし、救命センターでは、通常の撮影方法では撮影できない方を、いかに効率よく無駄なく安全に撮影するかが問われ、一刻を争う現場なので時間との勝負でもあり自分の未熟さを痛感しております。そんなある日、先輩から突然「うちの病院の技師が他の病院の技師には絶対に負けない事があるが判るか？」と聞かれました。自分は判らずに首をかしげると先輩は「どんな状態の患者が来ても基本となる型に当てはまるような撮影をしてみせることであり、そこに放射線技師としての誇りを、少なくとも私は持って仕事をしている」と教えていただきました。多発外傷でそれこそ全身の撮影をしなくてはいけない患者様を目の前にして、どこからどう撮影していけばいいのか判らず、指の一本もまともに撮ることができずに怖じけずいてしまった私に対して、そんな患者様にも動じずに的確に効率よく安全に撮影する先輩は本当に素敵でした。

今の自分にはそこまでの技術も自信も誇りもまだ有りませんが、一日も早く先輩に近づくことを目標に精進することが、今の私の心情であり、是非皆さんへのメッセージとして「他の人には絶対にこれだけは負けないと言える誇りを持った診療放射線技師」を目指していただけたら嬉しく思います。また、自分も将来他人に負けない誇りを持った診療放射線技師として胸を張って仕事ができるように努力していきたいです。

以上

---

\* 通巻 214 号 2015 年 1 月 10 日発行(H26-No.4)より